

陳舜臣さんを語る会通信

NO.116 May. 2024

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2024年5月20日
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

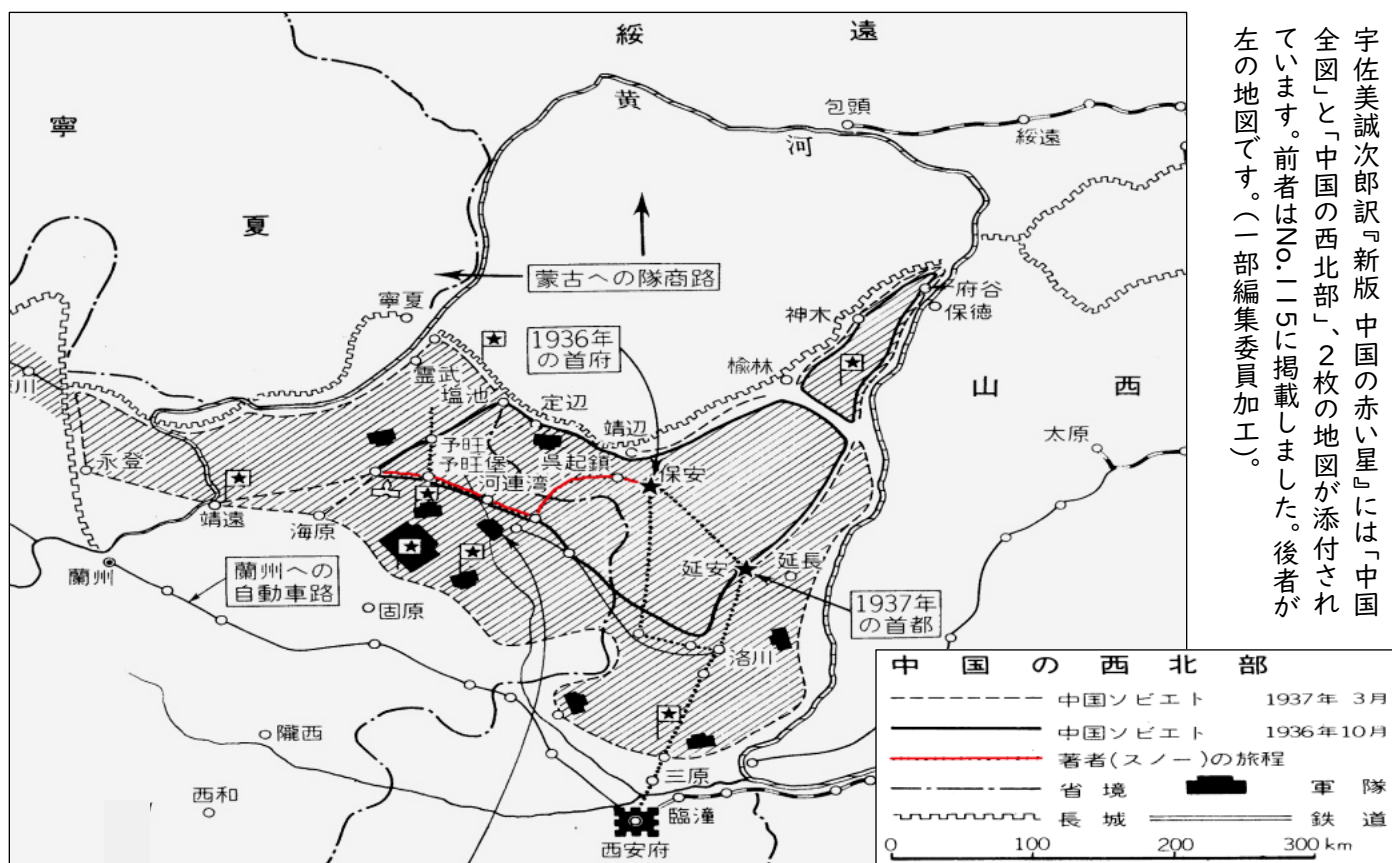
No.115に続き、宇佐美訳『新版 中国の赤い星』を紹介いたします(後半I)

前No.115で、エドガー・スノウ著『Red Star over China』の日本語訳、宇佐美誠次郎訳『新版 中国の赤い星』(1964 筑摩書房)の前半を紹介しました。本号では、同著の後半を取り上げます。

また、1976年9月、毛沢東死去の情報に接し、陳舜臣さんは「歴史を見る毛主席」を『朝日ジャーナル』に、「詩人教師毛主席」を『現代』に、「巨星墜つ—毛主席のこと」を『小説現代』に執筆しました。この内、「詩人教師毛主席」はNo.114で取り上げました。本号7、8頁で、残りの2編を紹介します。

(編集委員 橘雄三)

章節題	内 容
七前線への途上にて■ 1赤区農民との対話 2ソビエト工業 3「かれらは歌いすぎる」	スノウは保安から、ソビエトの外交部から随行を命じられた若い共産党員とともに、甘肅省境を前線へと向かう。途上の、赤区の農民や工場労働者からの聞き取りである。 1赤区農民との対話■対話の一部。「わが国(スノウの国)にも金持と貧乏人がいるかどうか、共産党と赤軍があるか、どうかとたずねた。私が、なぜ共産党だけあって赤軍がないのかを説明したが、それはかれらをひどくびっくりさせた」
2ソビエト工業■	「前線に向かう途中、保安から西北数日の所で私は陝西省におけるソビエトの「工業中心地」呉起鎮を訪れた。…。兵器工廠は、山腹に掘った一連の円天井の部屋から成っていた。そこは涼しく風通しもよく、壁に斜めにほりこんだ燭台のあかりで照らされ、そして何よりいいことは爆撃をうけてもまったく安全なことであった。ここで私は百人以上の労働者が、手榴弾や塹壕臼砲や火薬やピストルや小榴弾や銃弾やいくつかの農具などを作っているのを見た」
3「かれらは歌いすぎる」■	ここで、スノウは、一人のすぐれた共産党員の電気技師のことは書き留める。「これらのひとびとはあまりに歌を唱って時間をすごしすぎます。…。いまはまだ歌を唱う時ではないはずです」「このことは、陝西ソビエトのこの特異な「工業中心地」における若者たちのうわついた現象について、多くのことを総括的に示しているように思われた」



宇佐美誠次郎訳『新版 中国の赤い星』には「中国全図」と「中国の西北部」、2枚の地図が添付されています。前者はNo.115に掲載しました。後者が左の地図です。(一部編集委員加工)。

宇佐美誠次郎訳『新版 中国の赤い星』(後半2)

章節題	内 容
八赤軍と共に(上) ■ 1「真の」赤軍 2彭徳懷の印象 3なぜ赤軍に入ったか？ 4遊撃戦の戦術 5赤軍戦士の生活 6政治集会	「甘肅と寧夏の丘や平原を、馬に乗ったり歩いたりして二週間旅行したのち、ついに私は予旺堡にたどりついた。それは南部寧夏の大きな城壁をめぐらした町で、そこには当時赤軍第一方面の司令部がおかれていた。——総司令は彭徳懷であった」 / 「真の赤軍」この節の題の意味するところは、赤軍の「若々しさとか、元気一杯なこと、よく訓練されていること、軍規の厳正なること、すぐれた装備をもっていること、とくに高度な政治道徳をもっていること…」などである。「赤軍のあいだでは主力軍、独立軍、パルチザン、農民赤衛隊を明確に区別している」「第一方面軍において、兵士の38%は農業労働者(職人、馭者、徒弟、農場労働者を含む)の出か、工業労働者の出であり、50%は農民の出身である。4%だけがプチブルジョア、商人、インテリ階級、小地主の息子である。赤軍の兵隊は将校も含めて50%以上が共産党員か、青年共産同盟員である」 2彭徳懷の印象 ■「予旺堡で私(スノウ)は彭の司令部があった場所に滞在していた」「私たちはいく度も食事を共にした」「彭の言葉や態度には何か解放的で、直観的で、終始一貫してしているところがある。——中国人のあいだではめずらしい性質である——私はそれが好きだ」 3なぜ赤軍に入ったか？ ■彭徳懷は「長沙から約90里の湘潭県という村に生れた。…。彭の家は富裕な農民だった」。この節では彭の経歴が語られる。 4遊撃戦の戦術 ■この節は、「さてここで私(スノウ)は、いかにしてまた何故に赤軍が成長したかに関する、彭徳懷とのまことに興味深い会見記をお話したいと思う」という書き出しで始まる。特に、「遊撃隊が成功するために守らなければならぬ若干の規則」としてあげる10の原則は興味深い。 5赤軍戦士の生活 ■「赤軍の食事はきわめて簡単だった。稷とキャベツ、それにわずかの羊肉かときには豚肉がつくのがだいたい毎日の食事だった。…。お湯がほとんど唯一の飲料であった。冷い水を飲むことはとくに禁じられていた」「各中隊、各連隊にレーニン・クラブがあった。あらゆる社会的な「文化的」な生活はここが中心になっていた。レーニン・クラブの部屋が部隊の中で一番よかった」 6政治集会 ■ある日、スノウは、赤軍の一人の青年と一緒に、「政治部の人たちが集会を開いているレーニン・クラブに向かった。赤軍の政治教育は三つの主要な集団を通じて行なわれている。三つの集団とは、部隊の指揮官以上の集団、小隊指揮者と兵士の集団、および軍属——料理人、馬丁、驢夫、運搬夫、掃除夫、および少年先鋒隊の集団である」
九赤軍と共に(下) ■ 1徐海東—赤軍の陶工 2中国における階級闘争 3西北の四馬 4回教徒とマルクス主義者	ある朝、スノウは、彭徳懷の本部で、徐海東という若い指揮官に会い、彼の司令本部を訪問する約束をする。 / 徐海東—赤軍の陶工 ■徐海東は赤軍第15軍団の司令で、その本部は予旺県にあった。この町は、「石と煉瓦でできた壮大な城壁をめぐらした古い回教の県城」であった。スノウは、「第15軍団といっしょに五日間暮した。…。私はかれの勤務が終わると毎晩かれと語り73師団の前線まで一緒に馬に乗って行ったり、また赤色劇場へ一緒に行ったりした」「徐海東は1900年、漢口の近くの黄陂県に生れた。かれの家は代々陶工で…」とかれの経歴が語られる。 2中国における階級闘争 ■「三日間というもの、私(スノウ)は毎日午後と夕方の数時間、徐海東やかれの幕僚にかれの個人的な生い立ちとか、軍隊のこととか湖北・河南・安徽ソビエト区(鄂豫皖ソビエト共和国)のこととか、西北地区の現況などについての質問をつづけた」「今あなたのご家族はどこにおいでですか」「私(徐海東)の一家は弟をひとり残したきりで、みんな殺されてしまいました。国民軍の軍官どもは徐家の者を66人殺しました。蒋介石は私の県を占領したら、徐姓を名のる者はひとり残らず生かしておくな、と命令を発したのですからね」。…。読むに堪えない記述が続く。 3西北の四馬 ■青海・寧夏・北部甘肅の地方は、四人の回教将軍、馬鴻逵、馬鴻賓、馬步芳と馬步青に分割統治されていた。ところで、これら4人の馬は、官僚や大地主や大牧場主らと結びつきその勢力を維持していた。この節では、このあと、「しばらく本題の記述をやめて、簡単にその歴史を見てゆくことにしよう」といい、中国における回教徒の歴史がかなり詳しく語られる。閑話休題。馬鴻逵は多数の妻や妾を持っていたが、更に、蘇州に美女がいると知ると、飛行機をやり新しい妾を迎えに行ったという話を紹介する。他方、農民は法外な課税にあえいでいた。そんなところへやってきたのが赤軍だった。 4回教徒とマルクス主義者 ■この節は、徐海東率いる第15軍団に配属されている回教徒の訓練部隊についての記述である。



左の画像は、エドガー・スノー
(当時34歳)の「中国国内通行证」
(1939年発行)

■松岡洋子訳『中国の赤い星 増補改訂版』(1972筑摩書房)より



宇佐美誠次郎訳『新版 中国の赤い星』(後半3)

章節題	内 容 ◆はキーワード
一〇戦争と平和 ■ 1ふたたび馬について 2「小赤鬼」 3実践中の統一戦線 4朱徳のこと	1ふたたび馬について ■この節では、赤軍騎兵隊の馬について語られ、次いで、スノウが、徐海東の司令本部から予旺堡へ帰るときに乗った立派な寧夏産の小馬について語られる。 2「小赤鬼」 ■まず、一人の「小赤鬼」、11歳で赤軍に加わり、長征にも参加したという15歳のラッパ手(少年先鋒隊員)の経歴が語られる。少年先鋒隊は青年共産同盟によって組織されている。かれらは12歳から17歳(外国式の数え方では11歳から16歳)までの少年で、伝令、炊事夫、ラッパ手、密偵、無線電信手、水運び、俳優、馬夫、看護手などとして働いていた。西安の不潔な牢獄には二百人以上の少年先鋒隊員がとらわれていた。続けて、何人かの「小赤鬼」の経歴が語られる。
3実践中の統一戦線 ■	「統一戦線」とは、「反日・抗日」の統一戦線を意味する。「刻下の任務として、国民党政府を「強制」的に抗日にさせ、なんとか妥協点を見出すように決定していたので、赤軍は毎日主として政治的な宣伝家として力をつくし、勝利によって勢力を伸張してゆくという軍事的な努力にはあまり力を尽くしていなかった」。他方、赤軍兵士のあいだには、統一戦線政策に反対する傾向も見られ、政治部員による一層の教育工作が必要であった。
4朱徳のこと ■	「若くして権勢を得、ぜいたくし、放蕩したこの地主の子孫が、それにもかかわらず、中年をすぎてから、若い時の墮落した環境を放棄することができ、また人間のすぐれた意志の働きによって、アヘンの耽溺もやめ、ついには家庭をも見すて、現代の最高の動機と目的とを生かすと信じた革命的な理想に全財産を投ずることができたということである」。そんな朱徳の経歴が語られる。 ◆1916年蔡鄂の四天王 1927年八・一暴動(南昌) 1928年井岡山会師 1931年第1回ソビエト大会(瑞金)
一一保安へもどる ■ 1途上での所見 2保安の生活 3ロシアの影響 4中国の共産主義とコミンテルン 5外国人の顧問 6赤色中国への告別	1途上での所見 ■スノウが寧夏から陝西の保安へ戻る途上、甘肅での出会い・見聞である。 2保安の生活 ■蒋介石は新しい「掃蕩戦」の準備を進めており、保安をとりまく環境は厳しさを増していた。スノウは、西安府へ戻る手はずがととのうのを待った。 3ロシアの影響 ■節の冒頭、「この著書は、元来その主要な目的のひとつとして、中国共産党とロシアの共産党、あるいはコミンテルン、あるいは大きくソビエト同盟との関係を記述しようなどとは考えていない。…。しかしこのふたつの組織的な関係について、あるいは中国の革命史に与えたその重要な効果についていくらかでも論評を加えないならば、不完全な著書になるおそれがある」と記し、この節と次の 4中国の共産主義とコミンテルン ■は、聞き語りといったこれまでの形式とは違っている。 ◆日本の「ファシスト侵略者」 1936-39スペイン内乱における「人民戦線」 トロツキー主義とスターリン主義 反帝国主義・反封建主義
5外国人の顧問 ■	「1933年、李徳(オットー・ブラウン)がひとりのドイツ人義勇兵として江西ソビエト地区に現われ、それ以来かれは政治上また軍事上高い地位をしめるようになった。三年間以上というものの、かれは実際に赤軍と行動をとにもするただひとりの外国人であった」。長征にも加わった。この節は李徳についての記述である。
6赤色中国への告別 ■	スノウは、保安を去る直前、毛沢東と会見する機会を得る。その時の毛沢東の言葉、「1925年から1927年に存在したような反帝国主義的統一戦線を結成する用意があります。このようなものこそ、わが国民を救うために残された唯一の方法であると確信しています」。つまり、第二次国共合作(「再婚」)を強く主張する。スノウに、保安を去る日がやって来た。当時、「張学良の東北友軍はどの戦線からも撤退してしまい、中央軍その他の敵意ある軍隊がそれにかわっていた」。そのような状況下、スノウは、「(ただ一つ、)まだ赤軍の前線と相接していた東北軍の地区」を通過し、保安を出て十日目、10月22日に無事、西安府に着く。



南昌八一起義指揮部旧址 (朱徳旧居)
編集委員撮影



毛沢東と朱徳
宇佐美誠次郎訳『新版 中国の赤い星』より
一部加工

宇佐美誠次郎訳『新版 中国の赤い星』(後半4)

章 節 題	内 容	◆はキーワード
一二ふたたび白色区域へ (前半) 1 叛乱の序幕 2 蒋介石逮捕さる 3 蒋介石・張学良と共産党	この章の執筆は、「1937年7月20日 北京にて」となっている。 1 叛乱の序幕 ■「私がソビエト地区を離れた時には、ちょうど青年元帥張学良の東北(旧満州)軍と蒋介石主席とのあいだが、日をおって緊張の度を加えつつあった。東北軍が、軍事的にも政治的にも徐々に変質し、赤軍を討伐するために六つの省に送られた傭兵の群から、その敵のかかげた抗日国民革命のスローガンに感染したひとつの軍隊に転化していった…。かれらは、「故郷を奪いかえし」かれらを家庭から追い出し、かれらの家族を暴行したり、殺害したりした日本人の手から満州をとりもどすという希望に忠実であれという唯一つの勧告によって心を動かされていた。東北軍の軍隊が反日赤軍にたいして次第に同情の念をもつようになったことはきわめて自然であった」。	
ここでスノウは、10月に西安に行つて、張学良と会見したアメリカ人作家ニム・ウェールズ嬢の会見記(ニューヨーク・サン、1936年10月25日号掲載)に言及し、「正しくそれは叛逆的な談話である!しかし蒋介石はあきらかにこの警告の重大性を過小評価した」。そんな状況下、「蒋介石は1936年12月7日かれの大型飛行機から西安の飛行場へ下り立った」「10日に参謀部会議が招集され、第六次総攻撃を実施する最終計画が正式に決定し、西北軍、東北軍、甘肅・陝西にある中央軍ほかに12日に動員令が下される旨宣言された」 ◆1936年日・独防共協定(一年後、イタリアも参加) 藍衣社		
2 蒋介石逮捕さる ■12月12日未明、張学良の衛兵長孫銘九が西安郊外の温泉地臨潼に逗留していた蒋介石の宿所に侵入。蒋介石は裸足で雪道を逃げたが、裏山で見つかる。蒋介石は孫に西安まで護衛され、不本意ながら楊虎城將軍および張学良將軍の客人(実態は拘留)となった。「数日後張学良は自家用飛行機で保安にとび、三人の共産党代表を連れもどった。それは軍事委員会副主席の周恩来、東部赤軍参謀長の葉剣英、西北ソビエト区政府首席の博古の三人であった」		
3 蒋介石・張学良と共産党 ■「共産党の首席代表周恩来は西安に来るとすぐ蒋介石を訪問した。この会見が委員長にどんな効果を与えたかは、何人も容易に想像されるであらう。周恩来——蔣の昔の部下で、その首に蔣はかつて八万元の賞金をかけたことがある——が室に入ってきて友好的な挨拶をした時には、もともと体が虚弱で心理的にもこの経験で深い打撃をうけていた蔣は、恐れて顔色を蒼白にしたということである…。しかし、委員長はすぐに周恩来と張学良の両者にたいする恐怖から救われた。ふたりともかれを統帥として待遇し席に坐って、国難にたいする共産党の態度を説明しはじめたからである。12月17日から25日までのあいだに、蒋介石、張学良、楊虎城および共産党代表はしばしば会議を重ねた」。この間、20日に、蒋介石の義弟で全国経済委員会常任委員宋子文が西安に着いた。「最後にまだ面子を保つための驚くべき仕上工作が行なわれた。張学良將軍が自分の飛行機に乗って委員長とともに首都に行き、そこで処罰を待つというのである!」		

今日の話題

十二日、西安事件五十年を迎える。共産軍包囲作戦を指導するために西安を訪れた国民政府の蒋介石委員長を五十年前のこの日、部下の張学良將軍が監禁し、内戦停止を迫った。

西安事件

古都、西安の郊外にある驪山(りざん)がその形勢で、唐の楊貴妃が湯あみした華清池もある観光名所だ。最近の報道では、蒋介石がつかまつた山腹に建てられた「捉蔣(そくしやう)亭」というあずまの名称が「兵諫(へいかん)亭」に改められたという。ここを訪れると、以前はガイドが蒋介石のかくれていた岩穴まで案内し、

「捉蔣」の一幕を面白おかしく話してくれたものだ。だが昨今は、北京政府が蒋介石の長男である台湾の蔣経國總統を相手に統一をめざす第三次国共合作を呼びかけている。個人攻撃めいた表現をひかえるのが、改名の趣意だろう。歴史の事実の一つでも、表現方法や評価は時代とともに変わることもある。

それにして、西安事件はナゾの多い事件だ。国民党側から首に多額の懸賞金を付けられていた共産党の周恩来軍事委員会副主席が張学良の招きで西安入りし、事件の解決に一役買った。ところが、事件後に蒋介石が発表した「西安半月記」は周恩来との対面に一切触れていない。一説では張学良が立ち会ったとされるこの会議で「内戦

停止が合意されたことはまちがいないが、約束にもとじて当事者が口を閉ざし続けたため、会議の詳細は今なお明らかにされていない。

事件発生から十三日目の十二月二十五日に蒋介石一行は解放され、自ら同行を申し出た張学良をともなうて西安を離れた。張学良はそのまま軟禁され、その後は一度も政治の舞台に出ることとはなく、いまも台湾に住む。

半月監禁して五十年やり返された、といえないこともない。だが蒋介石としては、政策選択のフリーハンドを確保するために、密約の証人で頑強な抗日派の張学良を無力化しておきたかったのではないか。

西安事件から半年後に盧溝橋事件が起きた。高圧的で一本調子な日本の大陸政策が「徹底抗日」以外の中国側の選択を一つずつ消していった。



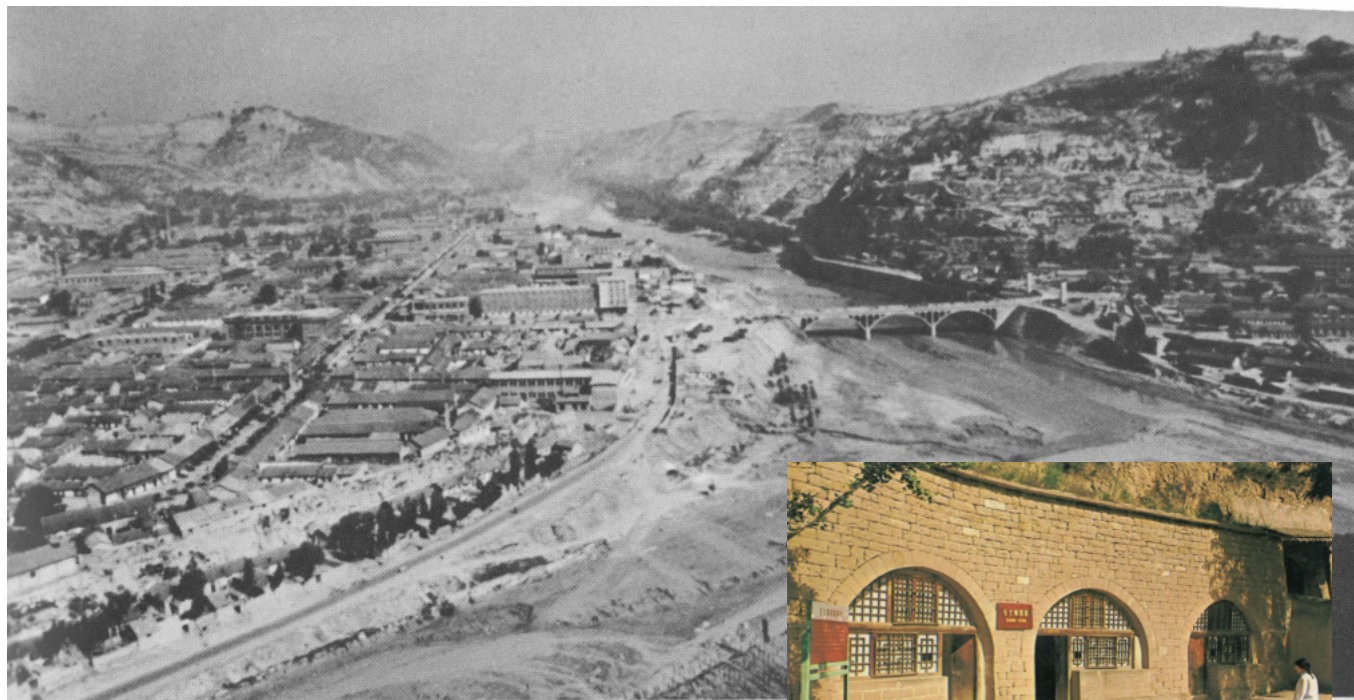
西安事件と"兵諫亭"

張学良軍の急襲から逃れた蒋介石は、西安郊外驪山中腹の岩陰に隠れているところを発見され捕らえられた。その地に建てられたのが"兵諫亭" (編集委員撮影)

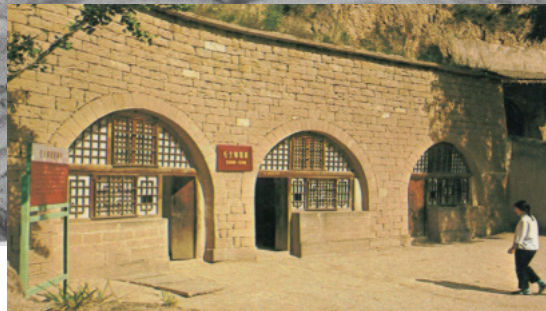
左は1986.12.11付朝日新聞

宇佐美誠次郎訳『新版 中国の赤い星』(後半5)

章節題	内 容 ◆はキーワード
一二ふたたび白色区域へ (後半) 4「両々相峙す」 5懐しき日? 6赤い地平線	4「両々相峙す」 12月31日、張学良は軍事法廷によって十年の禁固と五年間の公権剥奪を宣告された。そしてその翌日かれは特赦された。さらに重要なのは、西安事件が中央権力の基礎に深い裂け目をつくったことである。かれは、これが容易に拡大して、致命的な崩壊を来し、いっさいの計画を水泡に帰してしまうことを知っていた。そしてかれ(蒋介石)は、今や自分にとって一番有利なのは平和であり、平和常態のもとで、このような裂け目をことごとく除去してしまうことであると考へた。かれが西安でした約束を無視せず、自分を拘留した者にたいしてただちに報復するようなこともなく、たくみに一種の恩威兼ねほどこす政策をとったことは、真にかれが政治戦略の天才であることを示すものである
5懐しき日?	5懐しき日? 「経済封鎖は解除された。赤区と外部との貿易関係も成立した。もっと重要なのは両地域のあいだの交通がおのずから再開されたことである。接境地帯では赤い星の旗と国民党の青天白日旗とが交叉して立てられ、その連合を象徴していた。…延安にあらたに魯迅記念図書館が設立され、それを充実するために全国各地の共産党の同志たちは大量の新しい本を送った。数百人の青年共産党員が各大都市から北部陝西の新しい赤都延安へやって来た」「共産党の政策中のもっとも重要な変化は、地主の土地の没収実施を停止したこと、…である」「十年來の最も凶悪な内戦のあけく、赤と白とは突然「懐しき日」に遭遇したのである」 ◆新しい赤都延安
6赤い地平線	6赤い地平線 「赤軍は、英雄的な全力をあげての闘争を行なったにもかかわらず何故に中国の政権を獲得し得なかったのだろうか」「理由は根本的にきわめて簡単であった。その最も重要な点は、中国工業プロレタリアートの性格と存立条件であった。数的に非常に少なく無経験で、教育も低く、…、しかも恐怖があり、そのうえかれらのなかには多くの奴隷的小児労働や女子労働がふくまれ、その力は貧弱で内外の資本によって形容しがたいほどの搾取を受けて…。しかし、最悪の条件は、中国の近代工業が外国勢力の支配する地帯に集中し、これら各地の労働者が相互に隔離されていることである」。かくして、「都市におけるいっさいの暴動のころみは完全に失敗に帰した」。ほか、多方面から、この節冒頭の命題が論究される。 ◆1937年7月盧溝橋事件
エピローグ 一九四四年	エピローグ 一九四四年 この章、「1944年6月」執筆。「日本が中国征服の試みを始めた1937年7月の盧溝橋事件以来七年のあいだに、本書に描かれている中国人たちには、どんなことが起こったであろうか。…」で始まり、「中国にはじめて赤い星をかかげた物的、精神的、知的な勢力の勝利はそれほど遠いことではないのである」で終っている。 ◆「八路軍」「新四軍」



◆新都延安風景 延河に架かる橋は解放後のもの
 共産党は1937年1月から47年3月まで、ここに中央機関
 をおいて抗日戦争、解放戦争を指導した



延安の毛沢東旧居
 窑洞(ようどう ヤオトン)

一二ふたたび白色区域へ
 5懐しき日?

◆ 新都延安 補足

西安事件の補足

■NHK番組『張学良―私の中国、私の日本―』

西安事件についてもう少しこだわりたい。

張学良は、西安事件以後ずっと（一九四六年からは台湾で）軟禁生活を余儀なくされてきた。

彼が初めて公の席に顔を見せ、メディアのインタビューに応じたのは一九九〇年の六月のことであった。そんな変化のなかで、NHKの『張学良―私の中国、私の日本―』は九〇年十二月十日に放送された。聞き手は、桜美林大学の白井勝美教授とNHKの磯村尚徳特別主幹である。

この番組で一番ぐつと胸にきたのは、一九二八年六月三日、父作霖が日本の関東軍に列車ごと爆殺された（即死ではなかったが）ことに言及した箇所である。

張「父の亡くなったのは、ちょうど私の誕生日でした。私はかなり迷信深いのですが、私と父との間には特別な関係があったのだと信じています。私の生まれた日に父は初めて戦争に勝利しました。それから父はのし上がっていくのです。ですから、父はだれよりも私を可愛がってくれました。私は今も、誕生日が来るたびに父のことを思い出します。父はやさしい人でした。父の死はとてもつらかった」

次に、西安事件について語っている所を少し書き起こしてみよう。

磯村「その頃から、共産党を退治するのも大事だけれど、抗日の方が大事じゃないかというお気持ちを抱かれていたのでしょうか」

張「私はもともと共産党とは戦いたくなかったのです。蒋介石先生から頼まれて引き受けたものの、内戦はしたくなかったのです」

白井「将兵たちは東北地方に帰りたい、帰って日本軍と戦いたい、と先生に頼まなかったのでしょうか」

張「部下たちは共産軍と戦って力を失いたくなかったのです。力を蓄えて一日も早く日本軍と戦い、故郷の東北地方に帰りたいと願っていました。あの頃の私の立場はつらいものでした。部下は、あなたは蒋介石に従っておればいいが、私たちはどうすればいいのかわからず、と恨んだものです。私はほとんど困り果てました」

実際この頃、西安では大規模なデモが起こり、「内戦を即時停止せよ!」、「抗日戦争に立ち上がれ!」、「反共恐日の蒋介石、南京に帰れ!」などのシュプレヒコールを繰り返していた。

彼の証言やこの時の状況を考えると、西安事件は、張学良が信念に燃え果敢に遂行したというより、他を選択肢はなかったとも思える。

先に進もう。

張学良たちは、蒋介石を監禁すると同時に飛行機

張学良氏「西安事件」の舞台訪問?

【台北30日＝津田邦宏】

一日発売予定の香港の月刊誌「九十年代」五月号は、

国共合作の抗日民族統一戦線結成のきっかけとなった

「西安事件」（一九三六年）の立役者、張学良氏

（九三）が、昨年六月、ひそかに米國から西安を訪問していたと報じた。

張氏は事件後、国民党政權によって五十余年間、軟禁状態におかれていたが、一昨年に名誉回復。昨年三

香港誌が報道

ひそかに昨年6月
鄧氏の指示で了承

張学良氏

月、親族に会うため米國を訪れた。

同誌によると、張氏は米國滞在中の六月中旬、バン

コクから中国民航専用機で、昆明に入り、給油後、西安の北五十キロの陝西省内の軍用飛行場に到着。さらに賓客クラスに使う豪華ベンツ

で西安に向かった。西安市内を通らず、南郊外にある楊虎城將軍の墓をもうで

た。同將軍は張氏と共に事件を起こしたが、国民党軍が台湾に撤退する直前に処

刑された。張氏はさらに、事件の舞台となった、蒋介石・元國

民黨總統を拘束した華清池周辺を車からながめたとい

う。同誌は、この報道について、西安付近からの有力な情報筋によるとしている。

を当時中共中央のあった保安という奥地の町に飛ばし周恩来、葉劍英など共産側の代表を招いた。

白井「蒋介石さんと周恩来さんが西安で会ったわけですが、その時先生は立ち合われたのでしょうか」

張「私にとって、とても重要なことを質問しましたが、もうこれ以上は質問しないでください。（少し間）私が周恩来を蒋介石先生のところへ連れていったのです」

終始一貫、蒋介石には「先生」と敬称を付けているのが興味深い。

白井「その時の話の内容などは、今、あまりお話をしたくないということでしょうか」

張「すみませんが、これ以上はお答えできません」

この時の事は、蒋介石の『西安半月記』にも記されていない。（左は一九九二・五・一朝日新聞）

とは口をきかなかった。

張氏の西安入りの数日前に、楊尚昆國家主席が、タイ、インドネシア訪問の帰

途、昆明に立ち寄っているが、張氏受け入れの準備を

したという見方もある。同誌はまた、張氏が秘密

厳守を条件に、西安行きを求め、中國側が鄧小平氏の

指示で了承。台灣側も李登輝總統らが、大陸の統一戦

線工作に利用されないという原則で黙認したと伝えている。

としなかった。おなじ社会の仕組みのなかで、自分たちが変わっただけである。社会を変えなかった。毛主席のこの二人にたいする評価は、出身が近いだけに、かえってきびしいものがあつたにちがいない。

「巨星墜つ——毛主席のこと」(『小説現代』1976年11月号)

特別随想

巨星墜つ

——毛主席のこと——

陳舜臣



北京天安門広場の南に、人民英雄記念碑がそびえ立っている。正面の「人民英雄永垂不朽」(人民の英雄はとこしえに不朽である)の八字は、毛主席の筆跡である。基石のまわりには、アヘン戦争、太平天国戦争から抗日戦争、解放戦争にいたる、この百年来の革命闘争の図が浮き彫りでえがかれている。

私はなんどもここを訪れて、空を仰いだ。碑が高いので、碑を仰ぐと、すなわち空を仰ぐことになるのだ。碑の裏面には、この人民英雄記念碑が建造された由来が記されている。それは周總理の筆である。——民族の独立と人民の自由と幸福のために命をささげた英雄たちを記念するために、某年某月の某会議の決定によってこれを建造することにしたと述べられている。

ここへ来るたびに私はおもう。表面の八字は、豪放な筆跡である。毛主席の字は一向呵成に筆をおろしたものが多く、多いというよりは、ほとんどがそうである。字の大小や間隔などまったく考慮せずに、その筆は舞うかのような。書きあげたあと、脱字があるのに気づき、小さい字で無造作に書きいれたのを見たこともある。小さなことにこだわらない剛直なさまが、その行間からにじみ出ている。ところが、碑の裏面の周總理の字は、一点一画をおろそかにしない、堅苦しいばかりに均整のとれた楷書である。しるしてある文章も、記録をとめるといって、実務的な感じがするが、その字にも細心がさががわかれ

る。——半壁、海日を見る。という句に結びつけたという。水平線から太陽が半ば出るところだというわけである。これには教師も苦笑したことであろう。またあるとき、画用紙いっぱい楕円形をえがき、それをタガの写生と称した。

図画の成績は四十点であった。これは落第点だったが、ほかの科目の成績がよかったので、埋合わせで進級できたという。にが手は図画だけではなかった。自然科学の科目にも



興味がなく、まるで勉強しなかった、毛主席はスノーに語っている。そのかわり、社会科学系の科目は抜群にすぐれていたのだ。師範学校だから、おそらく習字の時間もあっただろう。なにもものに拘泥しない、みごとな手だと思えば、はたしてコナチの師範学校の書道の先生はどんな点をつけたであろうか? 毛主席はこのことにはふれていない。ともあれ嫌いな科目には完全にそっぽをむいて、まるで勉強しようとしなかったのである。これは歴史型、サラリーマンタイプではない。破格の人物であったことを物語る。

新しいものをつくり出すような人間は、やはり破格でなければならぬ。どんな科目も一応平均点をとるといふソツのなさは、レールの上にある。毛主席は死にた。中国人は、「悲しみを力にかえて」ということばを口にする。悲しみだけでは、怒りも、喜びも、歡喜も、ありとあらゆる人間の感情を、力にかえるべきだというのが毛主席のおしえであった。しかもその力は、組織された場合、何層倍の力を発揮する。

毛主席は死にた。中国人は、「悲しみを力にかえて」ということばを口にする。悲しみだけでは、怒りも、喜びも、歡喜も、ありとあらゆる人間の感情を、力にかえるべきだというのが毛主席のおしえであった。しかもその力は、組織された場合、何層倍の力を発揮する。

(カット・杉金 直)

かえるには、人間をそのようにつくりかえなければならない。意思と意識の問題である。それには思想教育が大切である。だから、毛主席は思想教育と組織とをともに重くみた。

毛主席の死を報じた新聞記事の見出しに、「巨星墜つ」とあるのを見た。五丈原で諸葛孔明が死んだとき、星が墜ちたといわれている。それから、傑出した人物の死に、この形容が用いられるようになった。このたびは、千七百数十年まえ五丈原に墜ちたのより、ずっと大きな星である。



人民英雄紀念碑

人民英雄永垂不朽

毛澤東 鄧小平

三年以来在人民解放战争和人民革命中牺牲的人民英雄们永垂不朽
三十年以来在人民解放战争和人民革命中牺牲的人民英雄们永垂不朽
由此上溯到一千八百四十年从那时起为了反对内外敌人争取民族独立和人民自由幸福在歷次鬥争中牺牲的人民英雄们永垂不朽
一九四九年九月三十日
中国人民政治协商会议第一届全体会议建立



碑面表の八字は毛沢東の筆跡
裏面は周恩来の筆で、記念碑建造の由来が記されている

(baike.baidu.com/pic/人民英雄紀念碑)

「巨星墜つ」で陳舜臣さんは、毛沢東、周恩来、二人の筆跡を比べ、性格、才能、革命での役割に言及している

天安門広場にそびえる
人民英雄紀念碑
右手に少し見えるのは
毛沢東紀念堂